江戸の蘭学者

文政期『医家人名録』の分析から

海原 亮

Rangaku Scholars in the City Edo

はじめに
❶文政期江戸における都市「医療」の実態
❷江戸市中の蘭方医
おわりに

[論文要旨]

本稿は、文政二・三年（一八一九・二〇）に刊行された医師名鑑『江戸今世医家人名録』を素材として、巨大都市＝江戸に達成された「医療」環境の実態を、蘭方医学普及の動向に即しつつ明らかにしたものである。

❶では、『江戸今世医家人名録』の構成と特徴、刊行の目的について考察した。近世期における医師名鑑とは、第一に、都市民衆が医師を選択する最も簡便な手法であった。同書はまた、医師が販売する家伝薬の宣伝・広告機能をも有した。一七七〇年代頃より学問的な体系の面では蘭方医学の興隆がみられたが、臨床の場にそれが流布するまでにはなお時間が必要であった。蘭方医学を由緒とする売薬・治療方法も掲載されたが、その数はわずかなものに止まっている。

続いて❷では、『江戸今世医家人名録』に所載された二〇〇〇名におよぶ医師データをもとに、各種の著名蘭学者の門人帳と対照し、その傾向を考察した。今回は、時期も区々な五つの門人帳（土生玄碩・華岡青洲・大槻玄沢・伊東玄朴・坪井信道）に限定し、その結果を網羅的に紹介した。照合作業に際しては名鑑類の史料的性格を考慮し、複数の材料を用いて慎重に判断した。

本稿に紹介したデータは、江戸における「医療」環境の実態を解明する基礎的な作業と言えるものである。すなわち、文政期頃の江戸では、蘭方医学の素養を有する医師が活動の場を持ち得る社会的基盤が醸成されはじめていた。本稿の最大の論点は、当時の江戸が抱えていた特殊な社会事情＝「医療」環境の独自性の指摘である。それはまず、藩医層の圧倒的存在であった。彼ら藩医の少なくない部分は、実際には藩邸の外に居所を得て、町内で診療活動を展開した。したがって、巨大都市に独特な社会構造や医師たちの存在形態を精確に踏まえてこそ、「医療」環境の特質・蘭方医学受容の背景は、より鮮明に性格規定される。

はじめに

今回のプロジェクトが諸地域の事例をとりあげ実証したように、地域蘭学の浸透状況に関しては近年、飛躍的な研究の進展がみられる。一方で、近世都市とくに三都（京・大坂・江戸）における「医療」＝文化的要素の考究は、依然たいへん心許ない状況にある。研究史は、支配状況や学統の分析を中心として文化を担った個々人の単線的な関係の解明に終始しており、その面的拡がりを総括し、把握するには至っていないように感じられる。そのような中で今回、素材とする『江戸今世医家人名録』[1]は、巨大都市に展開した「医療」を巨視的に把握できる好材料として注目すべきものである。

同じような分析手法として、最近、寛政～天保期の尾張名古屋（藩・町医）を対象とした事例が報告されている。[2]同地域における「姓名録」などの諸資料が、藩側による医師統制という政治的な意図のもとに作成されたデータということを考慮に入れても、同じ時期の江戸とこれを対比することもまた大変興味深い課題であり得よう。それは、『人名録』中に語られる内容が、都市＝江戸の特殊な「医療」状況を描き、同時に江戸の独自的地位を映しだすからである。

❶文政期江戸における都市「医療」の実態

(1)『人名録』の構成と特徴

まず、本稿で分析する『人名録』の全体構成について述べておこう。同書は「文政二年版」一冊、「文政三年版」計四冊（東・西・南・北）の全五冊から構成されている。[3]記載される内容は「文政二年版」「文政三年版」ともほぼ同じであり、「専科（＝医師の専門とする診療科目。本道、外科など）」「（藩医の場合のみ）仕官する藩名」「居所」「氏名」の順に、すべてが縦の一列に収まるように記される。[4]「文政三年版」は、東・西・南・北、各冊完結で整理・編集され、各々に掲載された医師は氏名のイロハ順になっている。ただし、イロハ別の各項目内の記載は順不同である。これは、次項に引用した「凡例」が述べるように、著者が情報を入手した順に次々と情報を付け加えたからである。

医師名イロハ順に編集された『人名録』を、実際に利用する状況を想定してみよう。同書を手にとった読者は、まず医師「氏名」から遡って各医師の専科・居所・身分を知る。このような手順を経て得ることのできる情報の仕組みとは、換言すれば「医療」を享受しようとする都市民衆にとって、実際にもっとも把握しやすい情報が「医師氏名」だったことを示している。また、「医療」を受けようとする局面にあって彼らが判断の基準とした要素とは、地域性（居所）や治療の内容（専科）といった項目ではなく、医師各人の名望や語られる評判であったことになる。医師名鑑は、民衆が医師を選択する最も簡便な手法たることはもちろんだが、我々は逆に検索手段の実態をみることにより、近世都市「医療」の特質をもうかがい知ることができるのである。

都市社会内部に存在する患者は、『人名録』に記載される医師の「居所」を頼りとして、各々が診療に赴いたと思われる。ただし、近世期段階における一般的な医師は、決して彼の居所のみで「医療」行為をおこなうのではなくそれと同じような頻度で往診を精力的にこなした者が多かった。それは、対手が幕府関係者や領主・有徳者の場合にはなおさらであり、著名な医師の診療日誌によれば、[5]頻繁に江戸じゅうを駆けまわる様相がうかがえる。

また、場合によっては、診察が終了した後、医師が作成した薬方書（処方箋）を患者が町在の薬種屋に持ち込む場合もあった。[6]そのような

場合、患家の下人が医師の居宅に処方箋・薬などを取りに出向く必要が生じる。『人名録』の「居所」は、ここで大いに活用されるわけである。

さらに、後述するように、医師の多くは自ら家伝薬を販売しており、その発売場所を名鑑に明記することによって幾許かの生業の助けとなす意味も想定されよう。ただし『人名録』中に記される半数以上は藩医であり、少なくない者たちが「居所」を各藩の江戸藩邸に置いている。この種のいわば〝公的な〟空間が、実際に「医療」の場となり得たかについては、従来の研究史（都市史とりわけ藩邸社会に関する研究）においても実証分析がない。今後の課題であろう。[7]

表1は、同書の全五冊に所載された医師数をまとめたものである。総計二〇〇〇名強を数えるが、著者である白土氏自身が「文政二年版」「文政三年版（各冊）」ともに掲載されているほか、数十名程度の例外を除き、ほとんど重複がみられない。出版の契機など詳細は不明だが、おそらく文政二年に出版された初版で市中の著名な医師を抄録し、市中で好評を得たために続いて企画された「文政三年版」が網羅的な体裁をとったものと想定されよう。[8]

表1 『人名録』に掲載される医師数

出版年	文政2年版	文政3年版				合計
		東部	西部	南部	北部	
人　数	542	360	356	393※	394	2045

※　うち16名が墨消しなどのため正確な名前がわからない。

もちろん、同書中に登場する医師以外にも、江戸市中には医を生業（専門、兼業）とする者が数多く存在したと考えられる。『人名録』が提示する数的規模とは、はたして文政期・巨大都市＝江戸の「医療」にとって如何ほどの部分を占めるものであったのだろうか。

(2)刊行の目的について

『人名録』の「凡例」部分からは、同書編輯に関わるいくつかの特徴が読みとれる。

凡例[9]

一〇此編我侭今日ノ業用ニ於テ益アルコト無ク又諸君ノ雷名モトヨリコレヲ待テ伝播スルニ至ラスト雖モ内外ノ科ヲ殊ニシ東西ノ居ヲ異ニスル自ラ舛誤ノ患ヲ免レス若シ此一冊子ヲ懐ニスルトキ江都数千家ノ佳名ヲシテ掌中ニ在テ専業旁及或ハ其居処等ニ至ルマテ一目瞭然窮捜ノ労ヲ省カンガ為ノミ

二〇諸家排列ノ順次ハ一時得ルニ随テ之ヲ記ス敢テ己カ意ヲ用ヒテ次第スルニ非ス

三〇此書専ラ其姓名居処ヲ捜索シ易キヲ要トス故ニ分ツニ伊呂波ヲ以ス又科ヲ分ツコト十三則　内科　外科　婦人科　産科　小児科　眼科　口中科　正骨科　鍼治科　経絡科　脈科　按腹科

本草家ナリ皆圏中ニ一字ヲ書シテ各人ノ上ニ掲ク

四〇書中遺漏スルモノハ宜シク其姓名等ヲ記シテ告示サレンコトヲ要スタ、其人ノミニ非ズ其相知ノ脱漏スルモノモ亦然リ他日二編ニ纂輯シテ上木スヘシ今ノ刻スル処トイヘトモ居所専業等未詳ノモノアリ姑ク余地ヲ存シテ其名ノミヲ列ス亦移居改名或ハ已ニ刻スルモノ誤字アラハ幸ニ告ケ給フヲ待テ火速ニ之ヲ改ムヘシ毎月五ノ日ヲ以テ家ニ在リテ専ラ其来リ告ンコトヲ等候ス故ニ左ニ両師ノ居処ヲ書ス看官宜シク之ヲ認記スヘシ

第一条の冒頭で指摘されたことは、これらの名鑑類が果たした役割とは何であったかを的確に示すものであろう。一八世紀以降、出版流通の進展とともに「医療」を受容する側にもたらされる情報の量は格段に増加した。著者自身が逆説的に述べているように、医師にとっては自らの所在情報を「雷名」として「伝播」することこそ「今日ノ業用ニ於テ益アル」状況となったからである。このように情報が「伝播」する様相とは、たとえば京・大坂などでは比較的に早い時期からの傾向であった。すでに一七世紀には各種名所記や名鑑類が多く流布したが、それらは同

時に様々な「医療」情報をも包含して、医師・患者の双方にとって重要な役割を果たしたのである。[10]

第二条は簡潔な記述であるが、叙上のような「医療」情報が伝播する仕組みと併せて興味深い部分である。著者がわざわざ断わっているように、名鑑類の所載にあって「排列ノ順次」が大きな意味を有したことは想像に難くない。『人名録』では、情報を入手した順（「一時得ルニ随テ之ヲ記ス」）と説明するが、恣意的な（「敢テ己カ意ヲ用ヒテ次第スル……」）要素をまったく排除することがはたして可能であったろうか。

第三条では、本書の構成について整理されている。第一条も指摘するようにこの時期の「医療」は、医師の専門的分化（「専業」「内外ノ科ヲ殊ニシ……」）がかなり進展していた。「江都数千家」とも言われる数の医師を居所のみではなく「医療」の必要に応じて適切な専科に分け把握することが、受容する民衆の側に求められるようになったのである。

表2は、「文政三年版」四冊中に掲載された各医師（千五百名余）の専科を整理したものである。

その特徴は、次のように整理される。①まず、本道（＝内科）を業とする者が圧倒的な割合を占めていることである。他の専科と兼帯する者（表2右半分）と併せると実に一二二六名を数え、全体の八割強が該当する。②対して他の専科については、針医が兼帯者を都合して八一名を数えるものの都市人口比で明らかに掲載される数が少ない。その要因としては、眼科・口科・産科がおこなう治療行為は、多く医師以外の「医療」従事者によっても供給されたこと、また、医師自身の意識下の問題[11]として、それらの専科が「雑科」とされ、重きを置かれなかった状況などが指摘できる。いずれにせよ本道以外の専科について、掲載の数値は都市における実態を反映しているとは言い難い。③「凡例」に提示される分類は、目安にすぎない。一三科のうち、脈科・按腹科とされる医師は一人もいない。また、正骨科・経絡科・本草家もわずかな数にとどまっている。これは一三科の分類が何に依拠するものかという問題にも関係するが、実際に江戸市中で展開される医業の実態が学問・統派を踏まえた枠組み（学統）とは大きく質を異にしたことを示している。あるいは、医師自らが看板として標榜する専科をそのまま反映したことも関係しよう。④筆者は、市井レベルで蘭方医学が顕在化するのは、天保期頃ではないかと推定している。[12]その仮説を裏づけるように「蘭方」を標榜する医師は、「文政三年版」になって初めて登場し、しかも『本蘭外方／巣鴨中邸／羽州庄内／近藤良碩』『外蘭方／神田於玉池／伊藤龍達』二名を数えるに過ぎない。一方、杉田玄白、大槻玄沢などのような著名な蘭方医学の研究者は「文政二年版」に外科として登場する。この事実を単純に踏まえると、彼らの研鑽した学問内容と診療実態が異なってい

表2　各医師の専科（文政3年のみ）

専科の人数	他の専科と兼帯する者（資料記載ママ）
外科　66	外産1・外針1・外接骨1・外本4・外本産1・外蘭方1
眼科　21	眼本10・眼癬1
口科　2	口針2
産科　8	産本1
小児科29	児産1・児痘1・児本4・小児疳労1・大人小児1
針科　73	針外2・針経絡1・針骨1・針産1・針本3
本道　934	本外166・本外眼3・本外骨1・本外産1・本外児2・本外針2・本外瘡毒1・本眼16・本脚気1・本古疾医1・本古方2・本口1・本産18・本産外1・本産骨草1・本産婦1・本児19・本児産1・本傷寒3・本傷寒産1・本傷寒疱瘡1・本傷針寒1・本針18・本針外1・本水腫3・本痘3・本婦10・本婦産1・本婦草1・本蘭外方1・本労症1・本瘡毒3・本癩1・本癩病外瘡毒1・本黴瘡1

ほかに，灸1／経絡導引1／古今医術1／古方後世1／骨2／痔2／疾医2／儒医1／水腫2／折骨難病1／吐方1／痘1／婦2／婦外1／本草2／名1／木3※／和方家1／瀉血1／瘡毒癩癇1／蚘虫1

註　資料中の墨消シにより不明分5。※の「木」は「本」誤植カ。

たとも読みとれようが、この点は、学問としての知識・技術が市中における臨床に応用されるまでに要するタイムラグと理解するのが妥当であろう。

合計二〇〇〇名以上にもおよぶ医師の情報を著者がどのように収集したかという点もたいへん興味深い。これについては、第四条が述べるように、医師本人や周囲からの「告示」が、やはり大きな位置を占めたと考えられる。「毎月五ノ日ヲ以テ家ニ在リテ専ラ其来リ告ンコトヲ等候ス故ニ左ニ両師ノ居処ヲ書ス……」とあるように、「凡例」末尾（九三頁の史料では引用省略）に併記された「両師」＝出版協力者がこれを担当した。「両師」とは、蘭方医学の素養をもつ武井周朔（後掲、奥州棚倉藩医、桂川月池門下）および稲葉潤堂（鉄炮町新道居住）であった。また「文政三年版」には、著者の子息を筆頭に、八名の門人氏名が列記されており、[13] 彼らが同書の校正をおこなったとされている。

先行研究も指摘するように、当時の江戸では、医師たちを軸とするいわゆる文化人のネットワークが多様に交錯していたが、①「医療」を供給する側の諸情報が、出版流通・書籍という形をとり提供されたこと。②『人名録』の掲載対象には漢・蘭の隔てがなく、需要者の必要を優先して情報が集約されたこと。以上の点は、あらためて注目すべきであろう。都市「医療」の発展・拡充は、まさにこのような社会的条件を前提として達成されたのである。

(3)宣伝・広告記事――蘭方を由緒とする薬・療方の紹介

都市社会の内部に居住し、医を業とする者にとっては、自らの所在・情報が名鑑類を媒介として、民衆一般へと伝播されることは、たいへん大きな意味を有したはずである。『人名録』編さんは、著者の言によれば、増大する「医療」受容層＝都市民の利益に供する目的を第一としたが、同時に、医師の側も書籍メディアの発揮する影響力に期待を寄せながら、積極的に情報を提供したものと想定されよう。名鑑類が有したと思われるこの類の機能は、『人名録』の随所に挿入された宣伝的記事からも明らかである。

『人名録』では、「文政三年版」の四冊に限るものの全体の約七～一〇％程の医師について、基本的情報（医師氏名・居所・専科・身分）以外に数行を割き、経歴や家伝薬に関する情報を併記した事例がみられる。[14] 表3は、その記載内容を整理したものである。

同表の右に示したように、おおよその内訳は①家伝薬、オリジナルな治療術の紹介。②蘭方伝来の由緒を有する薬、治療術の紹介。③医師（家）の由緒などを示すもの。④和歌・俳諧など、医師個人の趣味について。⑤医師の著書を紹介するもの、といったようである。

全体から比すると限られた事例であるが、①のように、「医療」需要者としての都市民衆に対し、家伝薬に関する情報が積極的に提供された点は、注目される。読者こそは自らが「医療」選択の主体であり、そのために、心性の問題として医師個人の名望をその根

表3　文政3年版『人名録』にみられる医師宣伝・広告記事

巻	広告掲載数／総計	記載される情報の内訳（重複あり）					
		うち藩邸に居住する者	家伝薬・奇方など紹介①	蘭方よりの伝来薬②	医家由緒を記すもの③	医師個人の趣味など④	著書を紹介するもの⑤
東	29／360	6	11	0	5	2	1
西	36／356	14	16	0	6	2	2
南	27／393	7	11	2	3	0	3
北	34／394	6	8	1	5	3	0

拠としたのであろう（③）。ただしこの場合、「読者」とは、ときに医書を購入し、知識を得ようとする社会階層に限定される。したがって、都市内でも限られた階層の者であることは指摘するまでもない。一方で、医師側の主眼はきわめて商業的な観点に置かれていたが、そのことは藩医たちを中心として広範な存在形態の医師が数多く存在した、江戸ならではの特質と言えるのではないか。

次に、宣伝・広告記事の具体例を引用する。[15]

(a)「東」部『本、外／両国元町／――／山口雲亭』

翁は下総八日市場の人、嘗て長崎に遊び、吉雄周倫に於て業を受く。親灸を数年、其蘊奥を究む。今江戸に来りて外科及内科を為す。其外科奇術に於て奏効す。尋常に称するところの外科者流と異なると云ふ。

(b)「南」部『外／中橋冨槙町／奥州棚倉／武井周朔』

樑涯と号し、和蘭外科を善くす。癰疽・瘡毒・金瘡・正骨、又解体の奥妙を究む。髪を結ひ、月池・桂川君に於て業を受く。五世互に相続し皆君之門に於て学ぶ。棚倉侯に仕ふ。亦五世歴世名家と謂ふべし。

(c)「南」部『本、産、外／外神田上邸／日向飫肥／鈴木長庵』

著するところ有り、「漢蘭雑録」三巻、「保養新編」「和歌本草」「以呂波寄」等を書すと云ふ。

(d)「北」部『眼／昌平橋内／――／藤井左冲』

和蘭一方・日月散、藤井氏の世に伝ふるところの神方なり。夫れ眼は一身之精華にして人体之至宝なり、而して其のため、疾痘・瘡疔・入眼或いは肝虚目暗・青盲内障、もとより衆医の難きところなり。翁能く人之禀性、眼之虚実を察視し、其症に随ひて治を施すこと百発百中。翁又自ら云ふ、君夫れ遠境の人踵到ること能はざる門の者、此薬に点ずれば其病眼亦有効に立つと。

(e)「北」部『本、外　本郷三町目東横丁大通　加州金沢　関口良哲』家有す、化金龍神方、主治、発狂・癲癇及び痰咳、又蘭方聖授香、黴毒に投じ而して即効あり、各神奇なり。

(a)～(e)は、『人名録』中から、蘭方由緒の言説を有する宣伝・広告記事をすべて抜き出したものである。(a)の山口雲亭のように、関東近郊を出身地とし長崎遊学の経験を持つ町医が、文政期頃になると江戸にも登場するようになった。『人名録』にみえる記載が事実とすれば、山口は、オランダ通詞家に弟子入りをし、外科（「親灸」とあるが）に関する外来知識を取得した。その経歴を巧みに活かし、「外科奇術」「尋常に称するところの外科者流と異なる……」というイメージを形成させつつ、自らの町医としてのキャリアを拡大させたのであろう。

一方、(b)・(c)・(e)は、それぞれ藩医の事例である。

(b)の武井は、『人名録』編さんにも関わった医師である（前掲）。記事によれば、同家は歴代に及んで蘭方医・桂川家門下であり、外科治療術に外来の知識を活かし棚倉藩に勤仕したという。もちろん、当時の幕府・藩では、外科・産科・眼科など一部を除いて、蘭方医学の知識を公的に展開することは不可能だったが、むしろ彼ら藩医レベルにおいてこそ、西洋の学術への関心は高く醸成されたのであった。鈴木長庵(c)の「漢蘭雑録」や関口良哲(e)の「蘭方聖授香」は、詳細な内容こそ不明だがその種の興味が結実したものと考えられる。

なお、(d)の藤井左冲は眼科を専門とする町医と思われるが、彼の蘭方医学の知識がどの学統より出自するものかは示されない。たとえば、土生玄碩門（後掲）にも彼の名前はみえない。もっとも『人名録』に掲載される宣伝・広告記事は、決して学問的な裏づけを立証するものではなかった。あくまで蘭方流を標榜する家伝薬の販売が主たる目的だったからである。

これ以外の記述によっても、江戸在住の（藩邸内に居住する藩医を含

む）医師の多くは、家伝と称する薬方を有したのであり、それらの販売こそが「医療」活動の実態であった。

❷江戸市中の蘭方医——各種門人帳との照合から

❶で述べたように、文政期初めの江戸においては、蘭方医学の素養を実際の「医療」場面に適用し、療治術また薬方へと用いていく流れが依然、初歩的段階のものではあるが、立ち現れていた。本節では『人名録』に記載された約二千名におよぶ医師を対象として、彼ら医師たちの間で蘭方医学の学術・知識がどの程度まで普及したのかという点を考察してみたい。

具体的には、主要な蘭学者の門人帳を『人名録』と照合する作業である。今回は、執筆者の準備の都合により、時期も区々な五種類（土生玄碩・華岡青洲・大槻玄沢・伊東玄朴・坪井信道）に限って分析をおこなった。今回のプロジェクトで示された手法が、医師相互の師弟関係を示し、蘭学的な学文を紡ぐ縦糸だとすれば、本節の結果は、巨大都市＝江戸に複雑かつ多面的に関わりあった横糸を解明する作業となろう。両者はともに以前より研究史で指摘されてきた蘭学者たちのネットワークの総体と言えるが、とくに後者はその結合の契機が実に多様な契機に起因した関係構造を有するのである。

(1)土生玄碩門下

はじめに、一八世紀末期以降、西洋流の外科的な手法を積極的に採用するなど眼科分野の中心的位置にあって活躍した土生玄碩の師弟関係について検証する。なお、この門人帳に関しては、すでに田﨑哲郎氏による紹介がある。[16]

田﨑氏によれば、「迎翠堂門人帳」は、玄碩が江戸に出て杉田玄白の家に寄宿した文化五年（一八〇八）以降の記載と推定されている。嘉永七年（一八五四）の没後も執事の手により引き続き帳簿は作成されており、明治一六年（一八八三）に至る計三一七名（番号。正確な人数ではない）の門人を掲載する。今回は、このうち安政四年（一八五七）入門以前までの一九七名に限り『人名録』との対照作業をおこなった。結果、土生家の門人または何らかの関係が認められる者は、次の一一名であった。刊行年・版ごとに、以下、列挙する（以下同）。

〔文政二年版〕

①『眼／上藩／丹波篠山／谷田部玄林』…記載は順に「専科、居所、所属藩名（町医の場合は記載なし）／氏名」である（以下同）。「迎翠堂門人帳」において「屋敷内　青山下野守殿医師　矢田部立賢」とされる人物がこの家系に該当すると判断した。両者はともに丹波篠山藩の江戸藩邸を拠点に眼科医として活躍がみとめられる。このように『人名録』と各々の門人帳との照合は、記載されるデータの詳細が完全に一致することがきわめて稀なため、照合にあたっては複数の判断材料を慎重に勘案して、以下の結論を得たことを明記しておきたい。

②『眼／日本橋十軒店／——／馬島周見』…周知のように馬島流は尾張馬島村に本拠を構え、当時、全国的な名声と隆盛を極めた眼科術の一派である。土生玄碩門にも「馬島道益　物故　尾張名古屋　尾張大納言殿医師」とあって、馬島家との間に師弟関係が確認される。一方、『人名録』に記載された周見という人物が江戸においてどのような活躍をしたのか、史料面からの実証は困難である。また、『人名録』「文政三年版」には「武州川越北町　馬嶋泰元」という人物も登場する。江戸近郊・川越の町医であるが、関東近辺における馬島流眼科術の展開過程については今後の課題としたい。

③『外／京橋因幡丁／予州松山／畑中分中』…「迎翠堂門人帳」に「京橋因幡町　畑中分中三男　畑中分容」とみえる。当時、産科医として著名であった（外科医と記載されるが）畑中氏が、自らの子息を土生門下に入れ、眼科術の修業をさせたと考えられる。分中は華岡青洲とも深い交流があり、蘭方医学の知識吸収にも熱心であった。[17] 在府の伊予松山藩医とされているが、居所である因幡丁は日本橋の中心に位置し、いずれの松山藩邸からも離れた位置にある。畑中氏の場合、町医としての名声が先に立ち、藩医に登用されたものと思われる。

④『外、眼／浜町山伏井戸／若州小浜／杉田立卿』…杉田玄白息である立卿（一七八六～一八四五）は、眼科医であった。プレンキ（J. J. Plenck）『眼科新書』"Verhandeling over de Oogziekten"翻訳で知られる。[18] その刊行は、文化一二年（一八一五）のことであるから、その直後となる。「浜街　御目見医師　酒井若狭守殿医師　○杉田立卿」とみえる。土生門下として当時すでに幕府「御目見」の地位にあったことが確認できる。

〔文政三年版〕

⑤『眼／本／麻布桜田町／筑後久留米／行徳元穆』…「筑州・有馬玄蕃頭医師　行徳温庵」とある。詳細な確認はできないが、久留米藩医であり、彼を元穆の親類筋に相当するものと考えたい。なお「文政三年版」には『眼／本材木町四丁目／――／行徳元格』なる者がみえる。元格については「筑後竹野郡の人、江都本材木第四街に住し、眼目一科を世業とす、元穆始め江都に来り業益広、後に久留米侯侍医となる、元格旧弟子となり其才秀を以って養子となり、長女を以って之に配す、別して一家を為すと云ふ」との解説がある。これによると、記録上では町医の扱いだが、行徳氏は藩医にありながら町在を許され、藩邸外にも居を構え活動をおこなった家系だったと考えられる。

⑥『本／愛宕下上邸／予州松山／渡辺春良』…彼もまた、江戸藩邸に詰め、活躍する伊予松山藩医である。門人帳においても、藩名・氏名を照合すれば彼の存在が確認される。記載の全体から判断する限り、彼の入塾は嘉永初年頃と思われる。文政期初め頃、本道医であった春良は、のちに西洋医学に関心を覚えたのではないか。なお、土生門下では、全体で五名ほどの松山藩関係者が確認できる（高橋玄修、平田太仲、天岸槻玄、畑中〈前掲〉、渡邊。入塾順）。最も早い高橋が「天保辛丑歳生年十四」すなわち、天保一二年（一八四一）の入塾と思われ、[19] その後約五年程の間に、土生門下生を五人も輩出する結果となっている。松山藩江戸藩邸の医師たちの間に、西洋医学の知識を受容する素地が醸成されたのであろう。

⑦『本／外／麻布日ケ窪上邸／長州府中／長松伝庵』…最も早い段階の入門に属する。土生の門下には長州藩出身者が少なく入門の契機や、江戸における活動の詳細は不明である。

⑧『本／外神田御堀通上邸／羽州米沢／内村玄知』…「羽州米沢　上杉弾正大弼医師　○内村玄智」とある。門下の米沢藩医にはその他にも伊東救庵・宮崎周伯がいる。[20] 時期的には離れているが、関連性が注目される。

⑨『眼／常州土浦（医官）／清水玄磋』…土浦藩医として、清水玄磋（「天保辛丑歳生年二十四」とあり）の名が確認できる。一方、安政五年（一八五八）入門の清水玄輪は、彼の子弟であろうか。「土屋采女正殿医師、玄隆男」とあり、同じく藩医身分であることは確認できる。土浦藩の関係者は他に見いだせないので、彼の場合は単純に眼科術に関する学問的な関心から入塾を果たしたと考えられる。

⑩『本、眼／芝口一町目上邸／豊後岡／二宮玄晏』…彼の場合も、藩・氏名がまったく一致し、その存在を確認できる。豊後国全体では計

六名、岡藩から三名の門下を輩出し、二宮が入門する直前にも「本石町三丁目　中川修理大夫殿内　葛城恒庵」なる江戸詰藩医の名前を見いだすことができる。

⑪『本／谷中三崎町／羽州山形／朝枝静安』…「呉服橋　秋元但馬守医師　○朝枝静安」とある。領主の秋元氏は、『人名録』にあるように、文政三年当時、山形藩主であったが、弘化二年（一八四五）一一月に館林へ転封となっている。谷中三崎町・呉服橋はともに秋元氏の屋敷が位置した場所である。なお、両者の静安は同一人物と思われる。彼の入門は転封の前・天保期初め頃と推定される。静安は本道医であったが、その息・静軒も元治元年（一八六四）に土生家の門下生となったことが「迎翠堂門人帳」から確認できる。[21]

(2)華岡青洲門下

次に、当時、外科治療・手術の分野において大きな功績を残した華岡青洲の場合について検討する。周知のように、青洲門下には、天明年間より維新期まで約千三百名に達する入門者があり、全国ほとんどにその名声が知れわたったとされている。[22]門人帳「春林軒門人録」（以下、「門人録」と記す）と『人名録』を比較照合した結果、次の二七名について師弟関係（またはそれに近い結びつき）が確認できた。さらに追跡作業をすれば、町医を含む江戸在住医師の間にも、青洲の影響を確認することが可能になる。

〔文政二年版〕

①『外／両国村松町／――／宮川順達』…青洲の高弟、宮河順達のことである。呉秀三氏によれば、[23]加賀金沢を出自とし、文化三年（一八〇六）以降、青洲門下になった。土生玄碩にも学んだとされる。文政元年（一八一八）、本道医として幕府の御目見となり、この頃、すなわち『人名録』掲載の時期が最も隆盛だったという。「迎翠堂門人帳」には、「□□（原文書破損）街　御目見医師　酒井雅楽頭医師　宮川順達」とみえ、その所在が確認できる。ただし所属は酒井氏（播州姫路藩主）となっている。『人名録』記載の居所・村松町は、酒井雅楽頭中屋敷（北神田）に近く、文政期初め頃の段階でも同藩との関係は継続されていたのではないか。同地に開業し、江戸中に名声を博していたのである。

②『内、外、骨／馬喰丁一丁目川岸／――／原澤文仲』…入門は文化一一年（一八一四）二月二五日である。「門人録」に「江戸亀井町　原澤文中」とあって居所も一致する。原澤氏の場合、典型的な町医と推定されるが、外科・正骨に先駆的な技術を有することは、都市内「医療」にとっても大きな利点たり得たであろう。

③『外／新橋加賀町／石州浜田／石川甫淳』…文化一二年四月一七日入門。「東都定府新橋加賀町」とみえる。定府藩医として藩邸にも近い新橋加賀町に居所を構え開業したものと思われる。

④『鍼／中橋上槙丁／――／中川良哉』…文政四年（一八二一）正月一三日の入門者に「中橋　中川良英」がある。両者には、何らかの関係があるのではないか。その可能性を指摘しておきたい。

⑤『内／青山百人丁手前／丹波篠山／渡邊汶龍』…渡邊氏の場合も、現時点では本人と確定する史料を見いだせていない。ただし篠山藩からは、文政八年（一八二五）一一月一二日「青山下総守医官　渡邊尚謙」、文政九年（一八二六）二月二五日「笹山家中　渡邊岩雄」二名が入門したのが注目されよう。龍の居所「百人丁手前」は同藩下屋敷を指すものと思われる。

⑥『外／下谷藩／勢州久居／蜂屋元常』…「門人録」には重複して登場する（「伊勢」および「武蔵」の項）。天保七年（一八三六）六月一三日が入門日で、名前は蜂屋元東とされる。居所は「江戸下谷向柳

原久居藩中」であり、『人名録』記載とも一致するため、時期的な点から考えて元常の子弟に相当する人物ではないか。

⑦『内、外／中藩／奥州会津／高橋玄順』…やや時代は下るが、安政六年（一八五九）五月二八日、会津藩医・高橋順甫なる人物が入門と記録されている。玄順との関係は不明である。

〔文政三年版〕

⑧『本／大久保下邸／丹後宮津／三上順道』…文化六年（一八〇九）二月一八日、宮津藩医「三上順道（名順、字順道）」入門が確認される。

⑨『針／青山百人町末上邸／予州西条／木村春碩』…彼の場合も確認は不能だが、「門人録」文化八年（一八一一）部分に「西條医官木村右善」なる人物が入門しており、その関係が注目される。

⑩『本、外／芝新堀中邸／讃州丸亀／三田耕亭』…同じ三田姓の丸亀藩医が入門を遂げている。文化九年（一八一二）二月一三日「丸亀藩中　三田玄升」、文政一一年（一八二八）五月五日「丸亀藩中　三田文輔」、文久元年（一八六一）九月一二日「丸亀藩中　三田元澤」と時代を越えて三例が確認できる。耕亭を含めて青洲門に近い存在の医師（本道、外科）と言えよう。

⑪『本／木挽町五丁目／石州浜田／二宮齢甫』…文化九年八月二四日入門。「門人録」に「江戸八丁堀亀町　松平周防守家中　二宮齢脩」とみえる人物との関係が注目される。齢脩の所属が棚倉藩とされる点に疑問が残るが、周防守中屋敷は木挽町五丁目からも至近に位置する。

⑫『本／本郷五町目上邸／加州金沢／今井昌軒』…文化九年六月一五日入門、藩名・氏名ともに一致する。研究史は、文化～文政期ころに青洲の名声が頂点を迎えたと指摘するが、この事実は江戸における入門者の多さからも確かめることができる。また、外科医に限らず、『人名録』中で本道医とされる者のうちにも入門者が目立っている点に注目すべきである。

⑬『本／外神田上邸／日向飫肥／由地良察』…文政三年一二月一日に、飫肥藩医の由地春渓が入門したとの記録がみられる。『人名録』刊行のまさに同じ時期であり、両者は同一人物と考えられる。由地も、本道を専門とする医師として記録されている。

⑭『外／浅草鳥越上邸／肥前平戸／貞方立養』…文政四年五月一二日、藩名・氏名ともに一致する。

⑮『本／新橋森山町／――／雙木元武』…文政五年（一八二二）二月、「高麗郡飯農宿　雙木元武」という同姓同名者が入門している。居所は全く異なるが、近郊から江戸に出て、町医として活躍したことを想定したい。なお、文政六年（一八二三）四月一日入門者に「高麗郡飯農宿黒田領分　雙木元民」がおり、両者は、何らかの縁戚関係と考えられる。

⑯『本／麹町元善国寺谷／志州鳥羽／松井玄竜』…これも同一人物であることの実証はできていないが、文政八年八月一日の入門者に「波切村　松井萬庵」がおり、同村は志摩国に位置する。『人名録』記載では、松井玄竜が江戸在住で藩医とされる点は課題として残るが、検討を要する事例ではないだろうか。

⑰『本／神田明神下上邸／信州岩村田／中嶋昌庵』…文政一〇年（一八二七）一〇月八日に「明神下　中島昌造（昌庵）」の入門記録がある。「門人録」には明記されてはいないが、『人名録』によれば中嶋は藩医であり、神田明神下に位置する内藤豊後守（岩村田藩主）藩邸を拠点に活躍した。

⑱『本／呉服橋内上邸／信州松本／堀内小学』…文政一〇年に二人の堀内氏が入門している。「松本家中　堀内桂造」は入門月日が不詳である。一方、同年一〇月一〇日に「松本家中　堀内儔司」が登場

する。両者はおそらく同時期に同じ経緯によって門下生となったのだろう。ただし、彼らが正式に松本藩医かどうか（子弟の場合も「家中」に数えられる場合が多い）はなお留保せざるを得ない。

⑲『児／青山百人町末上邸／予州西条／守矢子行』…文政一一年二月一七日、藩名・氏名が一致する。「門人録」には「東都」とあり、守矢氏が常府の藩医だったことが明らかである。

⑳『本／愛宕下上邸／予州松山／西崎杏庵』…氏名は一致しないが、松山からは（正確には藩医と記載されていない）「西崎昇伯」が文政一三年（一八三〇）一一月二六日に、また嘉永五年（一八五二）閏二月二一日、「松山藩中　西崎松伯」が入門をはたしている。杏庵も、彼らの親類筋に該当するのではないか。

㉑『本／本郷五町目上邸／加州金沢／大高元哲』…文政一二年（一八二九）六月二八日入門。彼の場合、居所・藩名・氏名とも一致する。

㉒『本／永田馬場上邸／肥前大村／近藤杏山』…大村藩からは、総勢三名の近藤姓の医師が記録されている。天保四年（一八三三）八月一二日「大村　近藤文仲」、弘化四年（一八四七）一〇月九日「大村　近藤尚適」、嘉永二年（一八四九）正月一〇日「大村　近藤春庵」である。

深川晨堂『大村藩の医学』（一九三〇年）によれば、同藩からは藩命によって藩医を目指す者の多くが華岡門に学んでいる。彼らもそのうちであり、正式に藩医となる以前に、短期間ではあるが修行に訪れた。

㉓『本／赤坂溜池中邸／肥前佐賀／三田道筑』…天保九年（一八三八）一〇月二五日には、「佐嘉藩中　三田昌仙」が入門している。ただし、これ以上の情報がないため『人名録』の人物と一致するかは不明である。

㉔『本／染井下邸／勢州津／伊東玄昇』…弘化四年正月四日、在府の藤堂藩医・伊藤玄叔が入門したとの記事がみえる。時期的には、『人名録』から二五年後のことであるので、これは彼の子弟関係に相当する人物と考えたい。

㉕『外／外神田上邸／日向飫肥／木脇道隆』…木脇氏の場合は、万延元年（一八六〇）八月三日、「飫肥那珂郡伊東修理大夫家中　木脇道隆」として入門の記録がある。『人名録』と同一人物ではなく、やはり子息と考えるほうが自然である。

最後に、次の二名を掲げておく。これらはいずれも史料的な裏付けに乏しくさらに厳密な検証が必要である。敢えて紹介するが、ここではその酷似性を指摘するに止めなければならない。

㉖『本／外神田上邸／濃州八幡／林俊庵』…文政七年（一八二四）一〇月一四日、「（濃州）本巣郡十八條、林俊平」なる入門者が記録されている。

㉗『本／八代洲河岸上邸／因州鳥取／牧野知工庵』…文久三年（一八六三）八月二九日、「鳥取藩　牧野文昌」。両者はともに藩医であり、興味深い事例と言えよう。

(3) 大槻玄沢門下

第三に、大槻玄沢の門人についてである。（本報告集所収の鈴木幸彦論文も参照されたい）彼が家塾を開設し、入塾の状況が判明する寛政元年（一七八九）より文政九年までを区切って照合した。結果、門人帳より江戸在住の医師と確認できる者のうち、以下の七名について、師弟関係を示す状況を確認できた。

〔文政二年版〕

①『外／上藩／越後長岡／吉見三良』…『人名録』記載より約二十年ほど前になるが、享和二年（一八〇二）五月一〇日「吉見元仙、直

養」入門の記事が残されている。藩名記載は「越後長岡」とあるのみで藩医なのか不明だが、あるいは元仙の子息が三良の世代に該当するのではないか。

〔文政三年版〕

②『本／愛宕下二葉町上邸／江州大溝／別所養寿』…寛政九年（一七九七）四月二六日、「分野左京亮内　別所新八友恕」入門の記事に拠る。

③『外／駒込中邸／和州郡山／熊沢昌庵』…入門は、文化四年（一八〇七）一〇月一二日「松平甲斐守家中　熊沢昌庵　中行」である。藩名・氏名ともに一致する。『人名録』から一三年前の記録である点に留意しなければならない。

④『外／鍛冶橋内上邸／土州高知／南良哲』…文化六年六月二五日入門、「土州　南良哲　正」はこれに該当しよう。

⑤『外／芝口通一町目／――／村上道伯』…文化一三年（一八一六）五月二八日の「江戸　村上道伯、不括」。彼は藩に属さない町医であり、『人名録』の時期とも非常に近い。藩医だけではなく町医レベルにも実際に玄沢の下に入門するなど、蘭方医学の知識を習得しようとする動きが文化期の後半以降、盛んになって来たことの証左とみるべきではないだろうか。

⑥『本／外鉄砲洲中邸／豊前中津／渡辺三立』…文化一四年（一八一七）八月四日、「江戸中津藩　渡辺三折、広」が入門。『人名録』からわずか三年前の記事であり、江戸詰医師という身分も同じゆえ両者の対照にはかなりの蓋然性が認められよう。

⑦『外／日比谷御門外上邸／長州萩／烏田智明』…文化一四年八月四日の入門、「長州　烏田智的　通」。氏名は異なるが、留意すべき事例である。

以上、江戸詰藩医の事例が目立つが、いずれも『人名録』以前に玄沢門下に学んだ事例であった。これを踏まえれば、文政期初め頃の各藩邸においては、蘭方医学の知識を活かした外科の治療術が公的ではないにせよ、用いられていた可能性があることになる。また、同所を拠点に、江戸市中へも実際にそれらの治療法が援用されていたのではないか。このように叙上の分析は、近世期段階の「医療」環境の実相をうかがい得る好例となるのである。

(4)伊東玄朴門下

以下、二つの門人帳（伊東玄朴、坪井信道）を検討するに際しては、留意が必要である。伊東・坪井の両者はともに江戸に開塾し、数多くの町医との間に師弟関係を有した蘭学者である。ただし彼らが師弟教育に力を注いだ時期は、『人名録』の刊行よりかなり時代が下ってしまう（玄朴の場合、文政一一年）。したがって、同書と比較対照した結果をどのように評価すべきかについては、別途、慎重な検討が必要である。

本稿では、伊東玄朴「門人姓名録」[24]との照合結果を示した。嘉永期以前の門人に限って検討すれば、以下の九名について興味深い結果を得ることができた。

〔文政二年版〕

①『内／上藩／越前敦賀／岩井升安』…「越前敦賀藩　岩井湞安」という門人がおり、彼の入門は、弘化三年（一八四六）頃と考えられる。藩名・氏名から縁戚関係などが想定されよう。

②『外／湯島天神下／筑後柳川／益城良輔』…同姓の門人としては、「筑後柳川藩　益城良済」「江戸　益城良甫」二名がみえる。良済は「門人姓名録」七番目に記載されており、最も早い時期における門人とわかる。一方、良甫の入門は嘉永六年（一八五三）のことと推

定される。『人名録』からは、約三〇年ほど時代を下っている。

③『内／金吹町／――／竹越元通』…地名・氏名から推察し「東都金吹町　後改中里玄英　竹越元英」は、元通の縁戚にあたる門人ではないか。入門時期は、弘化二～三年である。嘉永二年閏二月五日に入門した鈴木玄昌は、竹越を請人としている。この場合、竹越は町医として二〇年以上にわたり、日本橋の中心街（金吹町は本石町、常盤橋近辺）に居を構え、開業することができたほどの著名な医師であったことがわかる。

〔文政三年版〕

④『本／芝金杉上邸／因州鳥取／田中祐順』…天保期頃、早い段階の門人として「因州鳥取藩　田中純碩」という人物がみえる。

⑤『針／山下御門内上邸／肥前佐賀／高木元沢』…嘉永三年（一八五〇）一〇月入門「肥前佐嘉藩　高木元仲」との関係が注目される。

⑥『本、外／麻布竜土上邸／予州宇和島／谷口泰庵』…嘉永元年（一八四八）一一月一五日、「伊予宇和島藩　谷口泰元」が入門している。藩名・氏名から推察して、やはり『人名録』泰庵との関係は明白であろう。なお、泰元入門に際して同じ宇和島藩の砂澤中安が請人となっている。砂澤も玄沢門人であり、嘉永元年四月一五日に入門、同四年（一八五一）五月まで塾生であったとの記録がみられる。砂澤は、他にも嘉永七年入門の宇和島藩医早田貞幹の請人をつとめるなど、同郷の医師たちを紹介、教導する立場にあった人物。

⑦『本／数寄屋町／摂州高槻／瀬川陶以』…嘉永七年七月二日入門の「永井遠江守藩　瀬川」が藩名・氏名ともに一致している。紹介者は「山藤権之進」とあるが、彼がどのような人物なのかは不明である。

⑧『本、婦／大名小路上邸／備前岡山／岡崎秀民』…嘉永七年閏七月三日、「備前岡山　岡崎秀禎」が入塾を果たしている。この時の請人は「岡崎秀民」であった。『人名録』の人物と同じ、または父子関係ではないだろうか。秀民は、嘉永六年五月一日、同じ岡山藩医・山川正朔が玄沢門下に入る際にも請人となっている。『人名録』から三〇年を経た秀民は、同藩江戸藩邸において医師子弟の教育に深く関わる立場に就いていたのであろう。

⑨『外／濱町中邸／肥後熊本／福間恵迪』…福間氏の場合も、『人名録』とのつながりは明白である。「門人姓名録」四番目に記される「肥後熊本藩　福間長安」が恵迪の縁戚に相当する。次節に分析する坪井信道の門下には福間元庵がおり、長安はその兄に当たる。また先行研究『肥後医育史』[25]によれば、福間家は代々再春館（藩立の医学教育機関）の「金瘡師」を務める家系であり、恵迪は文政四年正月より、長安は嘉永三年九月より、また「福間泰安」が文政～天保期にかけて同役職にあったとされている。

(5) 坪井信道門下

最後に、坪井信道の師弟関係について分析をおこなう。[26] 宇田川榛斎らの高弟として著名な信道は、文政一二年、深川木場に蘭学塾「安懐堂」を開いた。家業・塾が軌道に乗った天保二年（一八三一）には、早くも居を深川冬木町に移転、「日習堂」と改称した。坪井門ではまとまった門人帳は作成されていないが、不十分ながらいくつかの手控が残されている。これを『人名録』の記載と照合した結果は次の通りである。

〔文政二年版〕

①『内／浅草中代地／――／桑田玄真』…川本幸民による控書の記述に、「桑田玄甫　江戸」という門生が確認できる。これ以上の情報はなく、浅草に居住する町医・桑田玄真と同じ人物との実証も不可能であるが、あえて提示した。先行研究によれば、坪井塾は門生の

負担を軽減するため束脩の負担を軽くしていたとのことである。叙上の如き高名な医家と異なり、坪井塾では町医レベルの門生も目立ったのであろう。

②『内／小石川三百坂／――／手塚良仙』…「手塚良運　江戸小石川」とあるのが良仙に該当する。手塚は後に神田於玉池に種痘所が開設されるさいのメンバーとして著名である。

③杉田立卿…土生玄碩「迎翠堂門人帳」の門人関係は前掲。坪井門でもあった（「杉田成卿　江戸両国山伏井戸、名信、字成卿、号梅里」）。〔文政三年版〕

④『本／永田馬場上邸／奥州二本松／小泉玄琢』…「小泉泰順　奥州二本松藩、安達郡池入町、父ハ尚賢・名章・字伯達・号辛稼軒」なる者が門人として確認される。入門の時期は不明だが、『人名録』の玄琢は、江戸では藩邸内に居住し、活躍していたようである。泰順は、本人ないし子息・縁戚筋にあたる医師ではないだろうか。

⑤『児、本／麹町二丁目北浦／――／竹内玄厚』…こちらも推察の域を出ないが、「竹内玄同　東都芝露月町、今住木挽町五丁目之横町、今麹町三軒屋」がそれに該当すると思われる。居住地区の変遷になお疑問の余地を残すが、町医として活動拠点をたびたび変えていたのであろう。

⑥『針、本／芝口一町目上邸／豊後岡／田能村宗朔』…「田能邨太一豊後中川修理太夫殿藩」とは藩名が一致する。述べたように、『人名録』とは時期が異なるため正確な比較対応は難しいが、藩医たる状況を踏まえれば、同じ家系とみなすのが相応しい。

⑦『本／外神田上邸／豊後杵筑／山田文泰』…「山田文安　豊後杵築、松平河内守藩、父ハ文泰、今在黄泉」とあるように、『人名録』とは約一世代分のタイムラグがある。すなわち、『人名録』にみえる藩医、町医、文政期頃には江戸で活躍していた者の子息たちが、多く蘭学塾に学んだことが知られる。

⑧『外／浜町中邸／肥後熊本／福間恵迪』…玄朴門下として前掲。坪井塾には、福間元庵（恵迪息。「肥前熊本之藩……父ハ恵迪、兄ハ張安」とあり）が入門している。『人名録』との関係が明らかな好例である。

本節における分析結果は、たんに各種門人帳の師弟関係を『人名録』と併せ、その人的な連関の実態を確かめるだけではない。視点を変えてみれば、江戸における「医療」環境の実態を解明する基礎的な作業ともなるのである。

すなわち、文政期初め頃の江戸について言えば、蘭方医学の素養を獲得した医師が実際に活動の場を持ち得る社会的基盤が、すでに醸成されはじめていたことが明らかである。そのような流れはまず、藩医レベルを軸としたいわゆる学文ネットワーク[27]を根拠とする場合が目立ったが、町医たちの間でも、積極的に新奇の「医療」知識を摂取していこうとする流れは、着実に拡大していたと言える。この点は強調されるべきである。しかし以上の実態は、蘭方医学が幕府によって公的に認知され得る情況をも同時に保障するものではなかった[28]。

これまでの研究史では、享保期以降、一八世紀後半にかけ、蘭方医学が学問として発展を遂げたことを大きく評価してきた。もちろん、それは事実だが、一方で実際に蘭方医学が社会のどの階層にまで受容したのかといった問題関心は、非常に希薄であったと言わざるを得ない。『人名録』が刊行された文政期初め頃には、江戸の民衆は蘭方医学を基礎とした治療をある程度、受容し得る環境にあったと言える。ただしそれは江戸が抱える特殊な社会事情、「医療」環境の独自性に起因するものと考えるべきであろう。

本稿における分析を踏まえると、まず第一に、藩医層の圧倒的な存在

が非常に注目される。『人名録』が藩医・町医をほぼ均等な割合で掲載されたのに対し、❷で検討した計六二名のほとんどが藩医であるという事実をどのように解釈すべきだろうか。筆者は、藩医レベルこそ蘭方医学＝最新の学問を積極的に担い、その展開を支えた社会階層と考えたい。だからこそ、叙上で何例かを指摘したように、藩医グループ間で師弟関係を保障・連携しあうような動きも見られたのではないか。

留意すべきもう一点は、彼ら藩医の少なくない部分が実際には藩邸外・近隣に居所を得て、町内で診療活動を実施したと思われることである。史料的な制約が大きいため、江戸藩邸の中に出入りする諸医師の実態については、なお今後の課題とせざるを得ないが[29]、彼ら藩医を媒介とすることによって町医たちもまた、彼らの学文ネットワークに加入することが可能となり、ひいては都市全体の学問・文化的向上に結び付いたのだろう。

以上のように巨大都市＝江戸に独特な社会構造や、医師の存在形態を精緻に理解してこそ「医療」環境の特質はより鮮明に性格規定されるし、蘭方医学が受容された背景も解釈可能となる。

おわりに

本稿における分析手法は、従来、研究史がとりあげてこなかった作業である。得られた結論を総括し、史料論的な立場から次の三点を指摘しておきたい。

第一に、一九世紀までに広く出版され、普及した名鑑類を民衆が需要する社会的な背景に関して検討をおこなうことができた。巨大都市＝江戸における「医療」環境は、読者である患者の立場からも彼らの主体によって選択可能な状況へと発展を遂げた。この事実は、社会的達成として十分に評価されるべきである。

第二に、名鑑類の前提となる社会背景を明らかにした。江戸に拠点をおく医師たちは、多様な存在形態を保持しつつ独自の活躍をみせたのである。同時に、彼らの構成する学文ネットワークは、学統・師弟関係といった一面的な分析のみでは決して把握できない類の史実であることが確かめられた。

第三は今後の課題だが、名鑑類より得られる各種情報の信憑性をどのように評価するのかという点である。『人名録』が記載する内容自体の史料批判は、非常に困難であり、様々な素材を比較対照していく地道なチェック作業が更に必要である。本稿でおこなったように、各種門人帳との比較作業は、ひとつの手法となるだろう。また、その他にも様々な要因、たとえば支配関係、経済的結合、地域社会・共同体の組成、趣味的諸要素など、多様な結合状況を踏まえ解釈を進めていくことによって、名鑑類ないし「門人帳」といった一次史料の有する性格はより鮮明になるものと思われる。

註

(1) 本資料は現在でも多くの資料保存機関に現存しており、著名なものである。大滝紀雄氏による翻刻（『日本医史学雑誌』二四―四）のほか、『医家伝記資料』上（青史社、一九八〇年）、『都市と医療―病に立ち会った人々―』（東京都港区教育委員会、一九九六年、高山優氏執筆部分）にも紹介されている。ただし、本格的な分析・研究は少ない。資料整理にあたっては、国立歴史民俗博物館のデータベース作成作業の中で入力したものをもとに筆者が直接、照合を実施した（東京大学総合図書館蔵、架蔵番号Ｖ１１―３２７を参照した）。煩雑さを避けるため、本文中では以下『人名録』と略記した。

(2) 岸野俊彦「近世医療都市名古屋と尾張藩社会―蘭方医野村立栄の諸記録を中心に―」同編『尾張藩社会の総合研究』（清文堂、二〇〇一年）所収。岩下哲典「尾張藩『御医師』の基礎的研究」『徳川林政史研究所研究紀要』三四・三五・三六。

(3) 「文政三年版」の各見開きには、「文政三庚辰校正／今世医家人名録／全部四冊／龍峰蔵版」と記載されている。

(4) 本文は「文政二年版」の場合。「文政三年版」では「居所」が先に示され、

「藩名」は「氏名」肩書の位置に添えられる。また「文政三年版」の方が江戸藩邸の場所などに関して記載が詳細、といった細かな違いもある。

(5) たとえば、杉田玄白の診察日誌（『杉田玄白全集』一、生活社、一九四四年、所収）。

(6) 拙稿「近世後期在村における病と医療―近江国小脇郷今宿家の事例から―」『史学雑誌』一〇九―七、七四～七六頁を参照。医師的存在ではなく医師による処方を受けたあとに、薬種の媒介（処方・販売）する役割を担った存在に着目したい。在村だけではなく、都市「医療」でも同じような状況がみられたと判断して良いのではないだろうか。

(7) たとえば、幕府医師の場合も『武鑑』に「居所」が示され、実際に江戸で「医療」活動を展開した例が知られている。藩医の多くは、藩邸内に居住するが、彼らの診療実態に関しては、研究史上いまだ不詳である。

(8) 正確には、「文政二年版」は「初版」と刻印され、出版されたものである。同書の奥付ページにある広告箇所では、『人名録』二版、三版の出版が予告されており、当初は「文政二年版」と同様の形態で補遺・追加の版を重ねようとしたことが想定される。

(9) 「文政二年版」の「凡例」より引用。なお一～四符合は、引用者による。

(10) 名鑑類の刊行、普及に関しては、国文学また出版文化史の分野における重厚な研究成果を参照されたい。なお、拙稿「一八世紀蘭方医学の展開とその社会的影響」『洋学』八（洋学史学会、二〇〇一年）では京に活躍する医師を対象とした名鑑類をとりあげた。これら医師を紹介する『人名録』類の名鑑は、江戸の場合、どの程度残されているのか。この点については研究蓄積もなく不明である。今後の課題としたい。

(11) たとえば、大槻玄沢「医師育才案」には、「右之諸科（引用者注、外科・針治・眼科・口科）は雑科と唱へ手業計覚候て別に学問等は不致候ても相済候様に世上一統之成行に相見得申候……雑科之輩は別て旧法家法を守り詰め他と弘く交り芸術之論議も不仕候故別て片意地偏屈歟之様に相見得候」といった指摘がみられる。藩によって事情は異なるだろうが、これら「雑科」がいわゆる本道医と比べ、技術面や意識下において異なる社会的位置に置かれたことは確かめられるのではないか。

(12) 前掲註(10)拙稿参照。

(13) 「門人校正」とされる八名は、（著者・白土氏の）男・白土椿寿、北総・秋田玄通、備中・福田拙斎、羽州・笹井伝庵、武州・山崎玄真、北総・大木玄淵、土州・吉本実蔵、南総・朝日政斎。以上である。門人の段階ゆえか、いずれも『人名録』には登場しない医師である。

(14) 大滝紀雄氏による『日本医史学雑誌』翻刻でも、医師の宣伝文について指摘されているものの分析はなされていない。

(15) 以下の引用は、原漢文。

(16) 田崎哲郎「資料『迎翠堂門人録』」実学資料研究会編『実学史研究』Ⅰ（思文閣出版、一九八四年）参照。

(17) 呉秀三『華岡青洲先生及其外科』（吐鳳堂書店、一九二三年）、一二〇～一二一頁。ただし、畑中分中自身は、「門人録」には登場しない。

(18) プレンキの著作については、すでに宇田川玄真が西洋眼科学を紹介する目的で翻訳を手がけていた。原書はドイツ語版、オランダ語訳を訳出（『泰西眼科全書』、未定稿）。立卿『眼科新書』は、これを増補・改定したもの。

(19) 高橋玄修に関する記載の肩には、「天保辛丑歳生年十四」と記載がある。これを字義通り天保一二年生まれと解釈すると、入門時期は安政期となり、「迎翠堂門人帳」の前後の記載に合致しない。そこで今回は「天保一二年に入門し、当時の年齢が一四歳」と解釈した。玄修の場合は、藩医を家業とする家の子息が、若い段階で土生門に学び積極的に外来の広範な知識を獲得した実態を示している。

(20) 米沢藩医・伊東救庵はシーボルト門下でもあり、眼科医として活躍した。筆者は最近、同氏に関する史料を閲覧する機会を得て、彼の藩医としての活動について分析を進めている。

(21) 「上野館林　元治元年十月二十七日入門　静安男　朝枝静軒」とみえる。

(22) 前掲註(17)同書、呉氏による。「春林軒門人録」も同書のものを利用した。なお、本報告集所収の高橋克伸論文も参照されたい。

(23) 前掲註(17)同書、一九〇～一九一頁。

(24) 「門人姓名録」は、伊東栄『伊東玄朴伝』（玄文社、一九一六年）所収のものを利用した。本節において入門時期を推定するさい、「門人姓名録」が門生の入門年代順に記載されたことを前提とし、帳面の前後関係などから判断した。以下同。

(25) 山崎正薫『肥後医育史』（鎮西医海時報社、一九二九年）九三頁。

(26) 坪井信道に関しては『坪井信道詩文及書簡集』（岐阜県医師会、一九七五年）中の諸論考を参照にした。門人関係を示すものとしては、川本幸民「養英軒雑記」、仲田一信『埼玉医学校　日習堂蘭学塾』、「大久保黄斎筆姓名録」が示されており、本稿の分析もそれを基としたものである。

(27) 近世期の都市に醸成された文化人ネットワークは、先行研究が古くから指摘するように、多様な社会階層・職種の者を広範に包含して成立した。本稿で検討した蘭学者・蘭方医学の場合、「医療」の担い手、供給する側が幅の広い存在に及んでいたことに留意しなければならない。すなわち学統関係に主に依拠しながら活躍する医師のみならず、売薬業者・振売的存在あるいは有徳者による

学習・知識など、あらゆる日常の契機によって「医療」は広範に展開したからである。「医療」の担い手は、必ずしも文化人とされる人たちのみに限らない。そのような意味を込め、「学文（学統・文化）ネットワーク」という造語をここでは仮説的に使用した。

(28) 衆知のように、幕府による蘭方医学の公認（研修の許可）は、安政五年（一八五八）を待たねばならない。

(29) 一般的な理解として、定府の藩医は、藩邸を拠点として往診活動などを中心におこなっていたものと思われる。藩医の中で上位、特別な立場の者に限って市中に居を構え、「医療」活動をすることが特別に許可される場合がほとんどと思われる。杉田玄白、大槻玄沢、箕作阮甫などの場合は後者の代表例と考えたい。

（東京大学大学院、国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者）

（二〇〇三年三月一九日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
vol.116 February 2004

Rangaku Scholars in the City Edo: Study of the "Ika Jinmeiroku" of the Early 18th Century

UMIHARA Ryo

This paper sheds light on the "medical" environment that had arisen in the huge city of Edo based on trends in the adoption of Western medicine using the physician' s register titled "Ika Jinmeiroku" that was published in 1819 and 1820.

In the first section I examine the composition and features of the register, as well as the purpose behind its publication. Physicians' registers during that period were primarily the most convenient means through which urban dwellers could select a physician. This publication also functioned as a conduit for promoting and advertising home remedies that were sold by physicians. Although from the 1770s Western medicine became popular as a system of learning, judging by this publication alone further time was needed for it to gain currency in clinical situations. Although medicines not requiring a prescription and methods of treatment that originated in Western medicine were also covered in its pages, their number is extremely small.

In the second section I compare the student records of famous Rangaku scholars in various fields on the basis of the data on the 2,000 physicians recorded in the register and study common themes found in these materials. In this instance I have limited my study to five student records from varying periods (Habu Genseki, Hanaoka Seishu, Otsuki Gentaku, Itoh Genboku, Tsuboi Shindo) and present the exhaustive findings of this study. When conducting this comparative work I took account of the nature of such registers from the perspective of their function as historical materials and used numerous materials to formulate my conclusions.

The data described in section two is basic research for explicating the actual situation of the "medical" environment in Edo. In other words, a social foundation was beginning to be fostered on which physicians who had been educated in Western medicine were able to practice medicine around the Bunsei period (1818-1830). The major contention arrived in the course of this study is the unique quality of the "medical" environment that was a special social condition found in Edo at that time. First of all, there is the predominance of physicians working for feudal domains. Due to the number of these feudal domain physicians, they did in fact obtain residences outside the feudal domain manors and dispensed medical treatment within the towns. As shown above, it is through making a close examination of the unique social structure and physicians in this huge city that we are able to characterize in greater detail the characteristics of the "medical" environment and the background to the acceptance of Western medicine.